

数学＝哲学＝愛?! なのだ

松本侑壬子・ジャーナリスト

数学は昔からダメだった。数学ができる人は、特殊な頭脳の持ち主で、自分よりランクが一つ上、と信じ込んできた。

確かに、この映画の博士（寺尾聡）は天才かもしれない。でも、彼に影響を受けて数学の魅力に目覚める10歳の少年も派遣家政婦であるその母親・杏子（深津絵里）も、ごく普通の人々だ。つまり、数学は結構日常的で楽しさもある知的遊びなのではないか。「ルートは、どんな数字でも嫌がらずに自分の中にかくまってやる、実に寛大な記号なんだよ」と博士が説明する言葉から、数式に込められたものの考え方＝人生哲学といったものが伝わってくる。これまで24が「潔い数字だ」なんて、考えたこともなかったが、博士の考え方になじんでくると、なるほどそんな気がしてくるのだ。

数学の天才博士は、しかし、日常生活では同時に深刻な悩みを抱えていた。交通事故の後遺症で記憶が80分しかもたないのだ。事故以来、1時間20分以上前に起こった出来事や語られた言葉がすっかり記憶から消えてしまうのである。

一見、想像もつかない大変な障害のようではあるが、考えてみれば、私には数学の魅力よりもこの悩みの方が身近に感じられる。だって、年々進む自分の物忘れのひどさには、ときに我とわが身が恐ろしくなるほどなのだ。もちろん、病名のある天才博士の悩みは、私ごとき凡人のケースとは同じには論じられないだろう。けれど、例えば大事なことを記録した紙切れを、自分の洋服のあちこちに留めつける博士のやり方は、私にも大いに参考になる(?!).

閑話休題。博士の病気と私の老化現象とは、まっ

たく似て非なるものかどうかは、よくわからない。ただ、心打たれるのは、博士は弱さ（後遺症）を抱えながら、それを受け入れ、それに負けずに数式を愛し続け、その制約の中で懸命に他者とのかわりを保とうとする姿である。博士の口から語られる数式は、決して小難しい専門用語ではなくて、温かくわかりやすく、知への驚きと発見へ導く魅力に溢れている。10歳の少年の心に、それはそのまままっすぐに染み込んでいった。

博士は、事故に遭うまでは、妖艶な未亡人である兄嫁（浅岡ルリ子）とある秘密を共有していたらしい。だが、記憶も仕事も失った今では、まるで広大な屋敷の離れに通いの家政婦付きで幽閉されているかのような。義弟とは厳密な一線を引いているかに見える未亡人は、その実、家政婦を母屋の窓の内側から常に厳しく見張っていた。ただ、ルート（博士が名付けた少年の名）の場合は、博士の意思で学校帰りにこの離れに来ることが許されたのだ。がっしりとした書斎の家具類、ガラス戸、黒板、緑の木立…など静謐な環境の中で、少年は博士の愛する数式の世界へと導かれていく。杏子も次第に博士の世界に心奪われていくが…。

長じて、宿命のように数学教師となったルート（吉岡秀隆）の授業は、博士譲りの人間味があふれて魅力的だ。「数学は女の子に向いていない」というのは偏見であり、博士やルート先生のような教師がいれば、男女を問わず数学嫌いの生徒はいなくなるだろう。ラストシーンで画面の外から挿入される女生徒たちの高揚した声が、それを裏付けている。それにしても、教師は責任が重い。



日本映画 (117分) / 小泉堯史監督

『博士の愛した数式』

渋谷東急 他、全国松竹・東急系にて公開中



©「博士の愛した数式」製作委員会